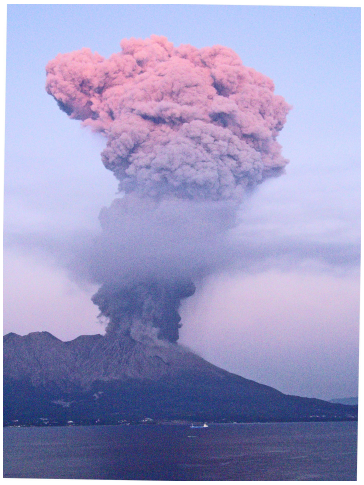
１０．　夕暮れの噴火：　2019. 11.8_17:24

10-1. 夕日を浴びた噴煙上部と激しい降灰

気象台のリストでは、南岳火口から噴煙高度5500mの爆発がありTopへとある。
撮影はB点だけからで、9-2で見たように18時の錦江台・垂水は暗い。

B：1 _172633e

2 _172848e e= Olympus-μ4



3 _172944er r= small rot.

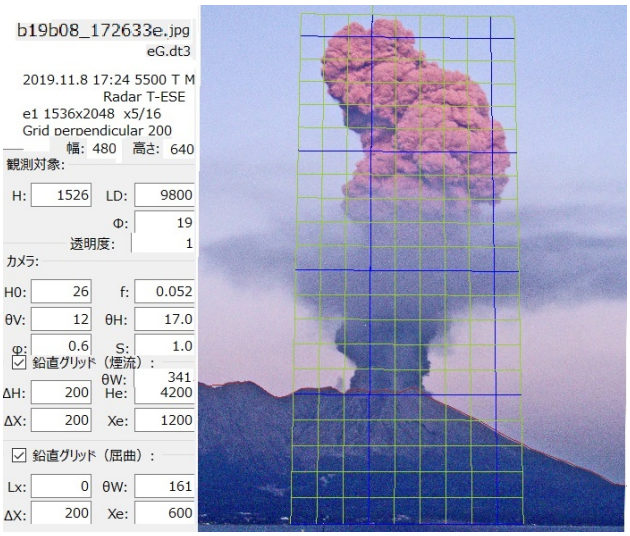
4 _173119er

5 _173343ec 上下cut

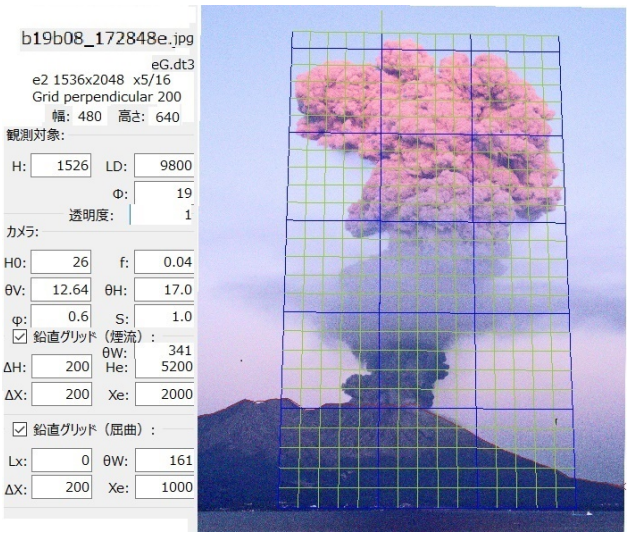
6 _173644er

7 _174229er

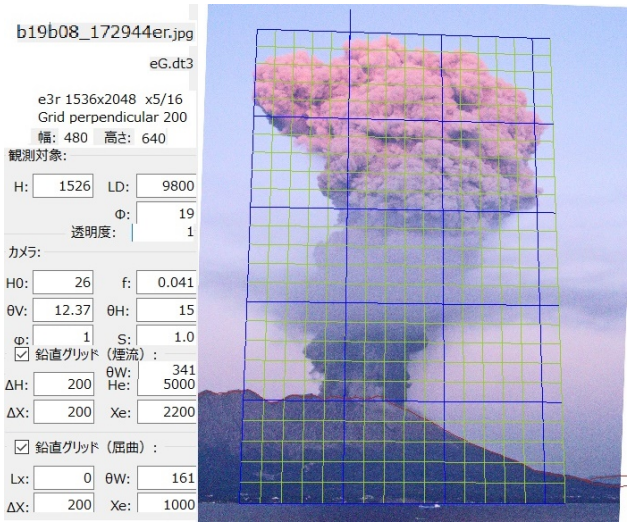
10-2. 直交グリッドで調べる



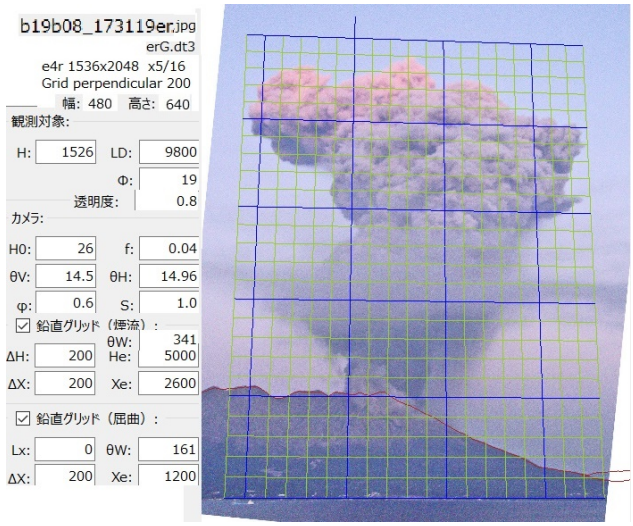
B：1 _172633eGc, c= central



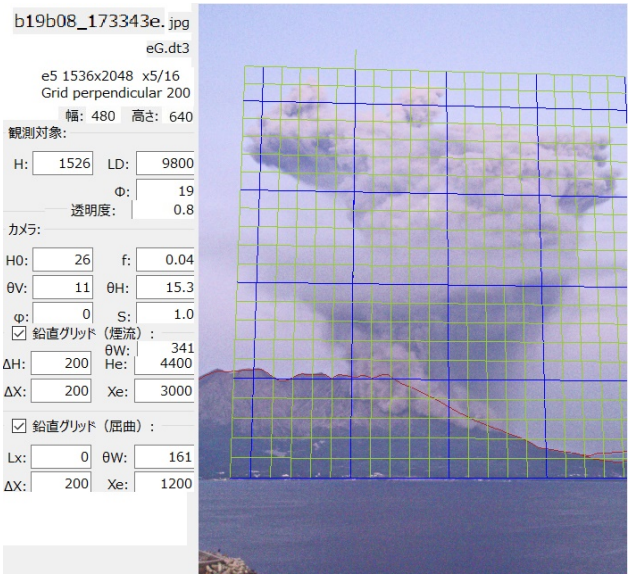
2 _172848eGd, d= down part



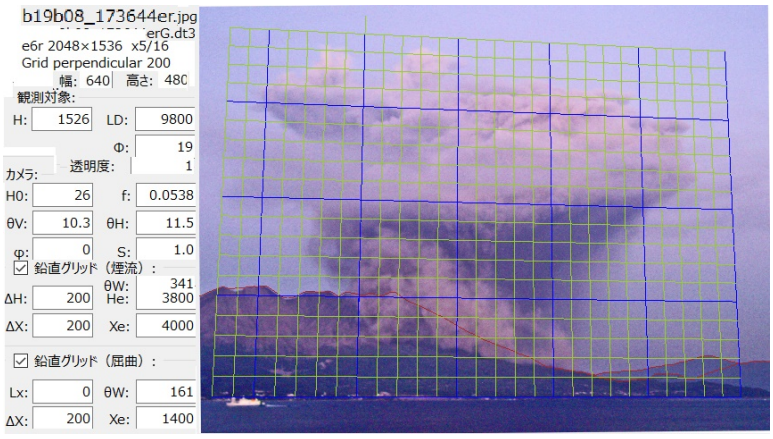
3 _172944erGu, u= upper part



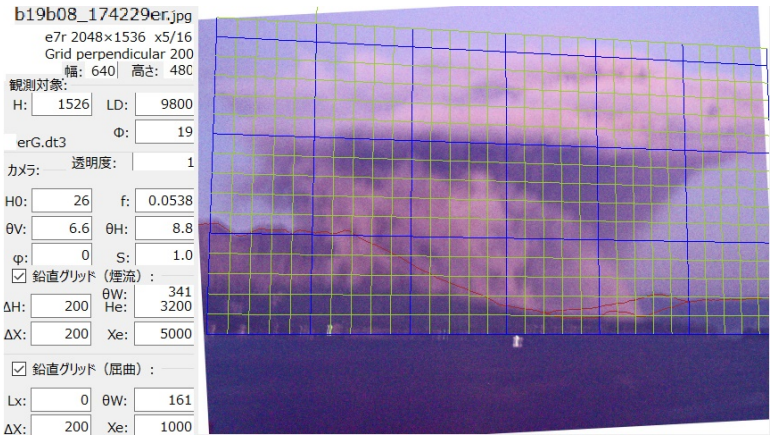
4 _173119erGd



5 _173343eG



6 _173644erG



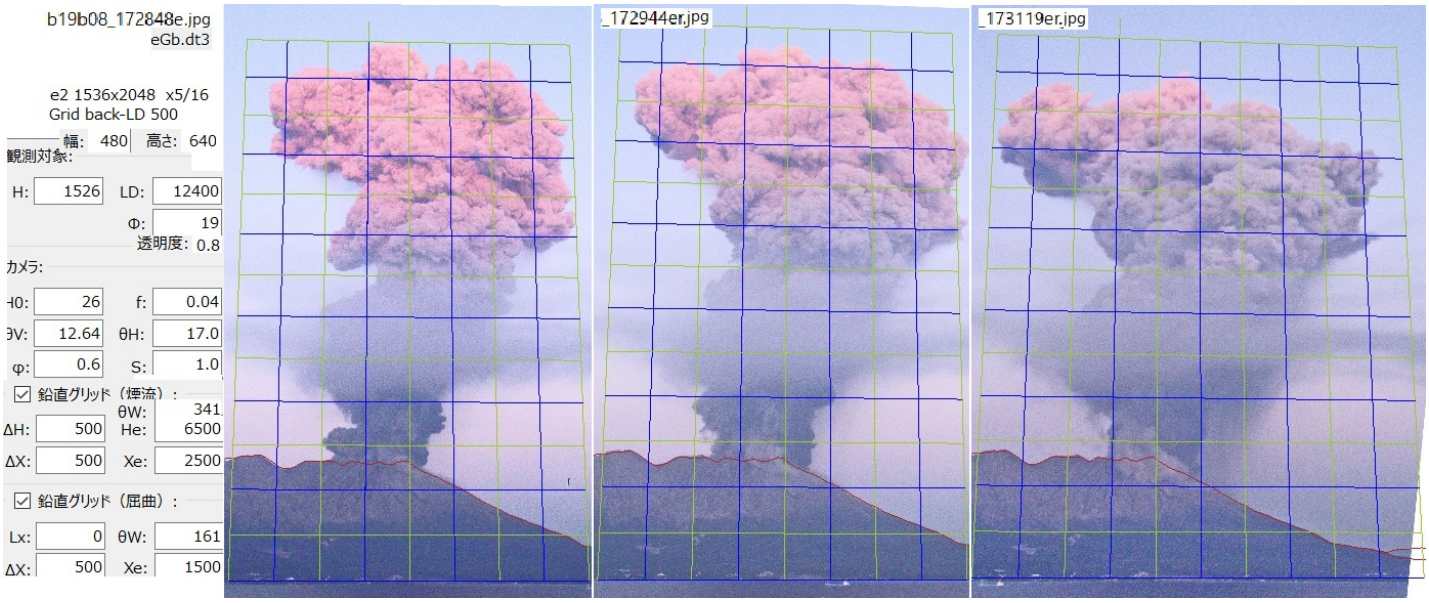
7 _174229erG

南岳火口(Φ=19°)とカメラを結ぶ線に垂直に、煙柱軸の左右に２つの鉛直グリッド(屈曲・煙流)を描く直交グリッドGを用いた。
直交グリッドのTopはHe、左右はそれぞれ屈曲・煙流グリッドのXeで、縦横の目盛ΔH，ΔXはどちらも200m間隔にとった。青線は1kmの倍数を示す。
実際には噴煙は後方に傾いていると推測される。レーダ画像では、一部は南側の激しい降灰に対応して南に張り出すと共に、 全体としてはゆっくり東流している。

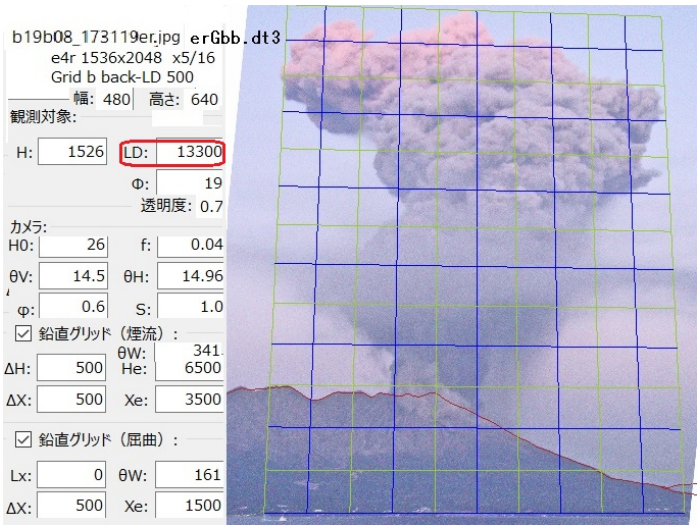
10-3. 噴煙頂部の東流?

リストにある噴煙高度5500mを保って噴煙頂部が東流して小さく見える効果を検討する。直交グリッドの軸の方向Φ=19°のまま、グリッドの上側He=6500mが煙頂と一致するよう観測点との距離LDを調整する。このようなbackする仮想的な直交グリッドを、ここではGb

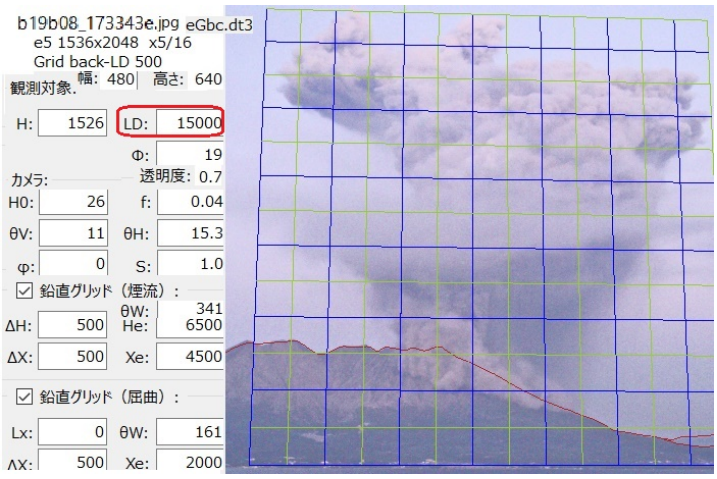
と記す。グリッドGbの縦横目盛は500m間隔にとった。 B1は上昇途中で、B2は最高点が6500mとするとLD=12400mである。しかし同じLDではB3,B4とだんだん低くなる。
次に、B4～B7でそれぞれLDを大きくしてHe=6500mが煙頂と一致するよう調整した結果を示す。
17:24に南岳火口のLD=9800mを基準とすると、B2～B7のLDが増大する速さは約9m/sとなった。これは煙頂部が流れる海抜高度6500mの西よりの風の風速に近いと見なせるようである。



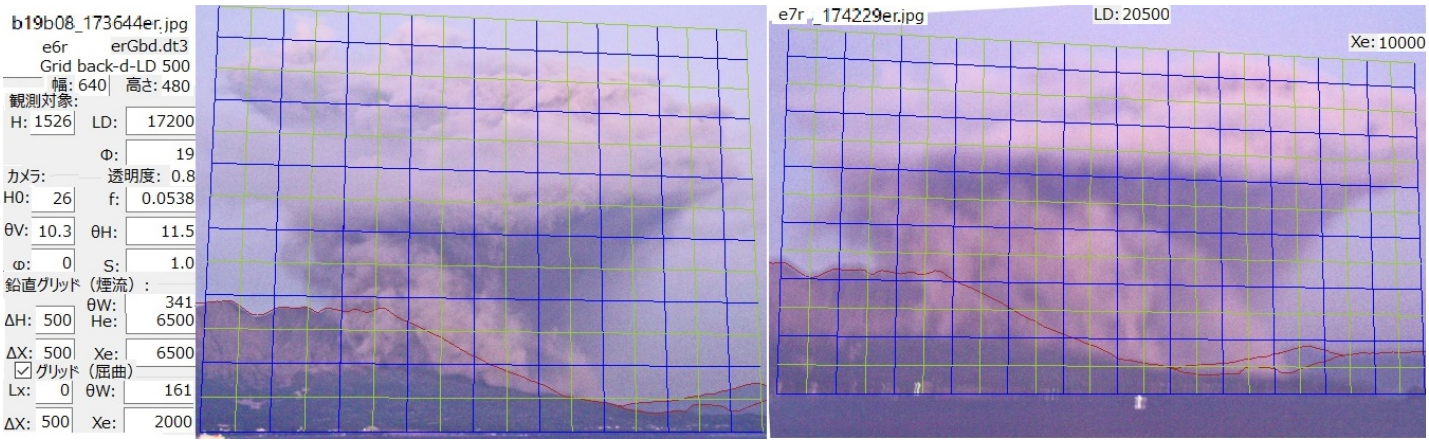
B 2-3-4 _1728-31eGb



B 4 _173119erGbb



B 5 _173343eGbc



B 6-7 _1736-42erGb